

『枕草子』の世界

——美意識としての「をかし」を補助線として——

菊 田 茂 男

はじめに

美学や文芸学で用いられる「美意識」という用語について、私は以前、次のように解説したことがある。⁽¹⁾ この私見は、今でも変わりがない。

美意識 (Ästhetisches Bewußtsein) とは、美的態度 (ästhetisches Verhalten) における意識過程をいい、その活動形式の上から、芸術創作 (能動的、生産的側面) と美的享受あるいは美的観照 (受動的、受容的側面) の二つの側面が認められる。このような意識過程は、多種多様の心的要素の複合体であるが、理論的及び実践的態度の意識過程における思惟や意志の存在に代わって、ここでは感覚や感情が主要な役割を演ずる。フォルケルトが没認識性や没意志性を、そしてカントが静観性や無関心性をそれぞれ美意識の一特色として挙げるのもそのゆえであろう。美意識においては、知性的なものよりも感性的なものが、また意志的なものよりも情感的なものが枢要な契機を成すからである。そして直接

にものを「観る」(Schauen) 働くと、直接にものに「感ずる」(Fühlen) 作用とが緊密に照応協働して美的体験の調和的全体を組成する。その場合、美的価値を快の感情 (Lustgefühl) のうちにより重く認めようとする共通項に依拠していることは言うまでもない。ギュイヨーが、美意識の成立根拠を社会的連帯性の普遍的共感に求め、更にラロが美意識の真の識閥は個人的事象であるとともに社会的、集団的事象であることを強調したのも、そうした共通項の内実を明らかにする一つの試みとして注目される。

一

山村美紗の推理小説『清少納言殺人事件』⁽²⁾ の「第四章 惨劇の予感」は、名探偵キャサリンとその恋人・浜口一郎 (大学助教授) との、次のような会話の導入部から始まる。

『『枕草子』は、少し勉強したんですか?』

浜口が、話題を殺人事件から変えるために聞いた。

「イエス。でも、むつかしかったわ。それで、原文を読むのはあきらめて、もつぱら、解釈や解説を読んだのだけど」

「それでもいいんですよ。何か感じるところがありましたか？」

「紫式部の『源氏物語』が、『あはれ』の文学であるのに対して、『枕草子』が『おかし』を基調にしていることだけはわかったわ」

「『おかし』というのは、なかなかいいとか、興味があるという意味でしょうね」

「そうね。本で見ると、菊田茂男きくた しげおという先生は、『好意的に興味を持って迎えたい気持ち』をあらわし、『自分の手もとに招き寄せて賞美したい』というようにおっしゃってるわ。私よくわからないのだけど」

「簡単にいうと、ナイス！ という意味でしょうね」

事件の進行に直接かわるわけではないが、ここに引かれた「菊田茂男という先生」の、「をかし」についての釈義がいささか気になる。かつて私も、同文・同主旨の解釈を示したことがあるからである。しかしながら、前後の文脈が消去されているので、真意を誤解されるおそれがないわけでもない。「簡単にいうと、ナイス！ という意味でしょうね」と一郎は要約するが、必ずしも的を射た発言とは言いがたい。「をかし」の美意識は、「ナイス」という語義を含みながらも、そこから派生する複雑な肯定的感情と美的構造を内包する。渡辺実わたべ じつは、「枕草子心状語要覧」において、「をかし」を左のように説明する。⁽⁴⁾

「あはれ」のような持続的な感情でなく、思いがそこから他へ拡が

るような重層構造を持たない。後に滑稽を意味する方向へ偏ってゆく、その片鱗は、すでに平安時代に萌しているけれども、なお「面白おかしい」の意は薄く、好意をもって物事をとらえる感情として広く用いられ、「あはれにをかし」のように「あはれ」と共に使われることもしばしばある。ただし「をかし」はあくまでも目下の事態に集中した心のはたらきに用いられる語で、次々と思いが拡がることはない。したがって心のはたらきとしては構造が単純で、そういう意味で陽性感情に属する。そう感ずることで自分が劣位にまわるような感情でなく、むしろ優性にある者の心であるとも言えることは、「をかし」に伴うのが「泣く」でなくて「笑ふ」であることにも現われている。好意をもって受けとる感情の「をかし」が、下賤や醜惡への評としても使われるのは、それが優越者の心だからであろう。

総じて穏当な見解ではあるが、なお首肯しがたい点も少なくない。改めて考察を継ぎ足さなければならないようである。

二

『枕草子』の美意識を表す用語は、多岐にわたり、多様な内容を示す。塚原鉄雄は、そうした「美的理念語彙」として次のようなものを挙げている。⁽⁵⁾

愛敬づく／あされたり／新し／あざやか(なり)／あて(なり)／
あてやか(なり)／あらまほし／ありがたし／あはれ(なり)／
いつくし／いまめかし／いみじ／うつくし／うつくしげ(なり)／
うらやまし／うるはし／おもしろし／神神し／かしこし／かなし
／きはやか(なり)／清げ(なり)／清ら(なり)／きらきらし
／けざやか(なり)／心ことなり／さらなり／すきずきし／涼し
げ(なり)／たとしへなし／たふとし／つきづきし／つややか(な
り)／なつかし／なまめかし／なまめく／にほひやか(なり)／
はえばえし／はづかし／はづかしげ(なり)／美美し／みやびか
(なり)／めやすし／めづらか(なり)／めづらし／めでたし／ゆ
かし／ゆるらか(なり)／よし／よろし／らうたげ(なり)／ら
うらうじ／若やか(なり)／艶(なり)／をかし／をかしげ(な
り)

更に塚原は、右の「美的理念語彙」を三種に分類して次のようにい
う。

第一種は、肯定形式の美的理念語、第二種は、否定形式の美的
理念語、第三種は、成句形式の美的理念語と、それぞれを仮称す
る。そして第一種は、その下位分類に、第一類として、美的特性
から規定する理念語と、第二類として、美的効果から規定する理
念語とを設定したい。前者には「清げ」「清ら」「美々し」などが
あり、後者には、「あはれ」「めでたし」「をかし」などがある。こ
の基準を適用すれば、第二種と第三種との美的理念語には、第一

類が欠如するわけである。

『枕草子』が、「心のほど見えて、いとをかしう侍れ。さばかりをか
しうも、あはれにも、いみじくも、めでたくもあることども、残らず
書き記したる」(『無名草子』⁶)美の諸相の集成であるにしても、塚原の
分類にいう第一種(肯定形式)・第二類(美的効果)に属する「をかし」
の美意識を基調とするものであることについては、異論のあらうはず
がない。『枕草子』の美意識にふれて、それぞれ独自の見解を提示しつ
つある根来司・原岡文子・沢田正子の視線も「をかし」の美的世界に
熱く注がれている。⁷「をかしから」五例、「をかしく」九例、「をかし
う」四八例、「をかしかり」一七例、「をかし」二〇四例、「をかしき
」六四例、「をかしか」四例、「をかしけれ」七〇例、「をかしげな
り」一例、「をかしげに」六例、「をかしげなる」一六例、「をかしさ」
一例など、総数四四五例に及ぶ「をかし」の用法が、『枕草子』の美意
識を規定する主要な契機となるからであろう。

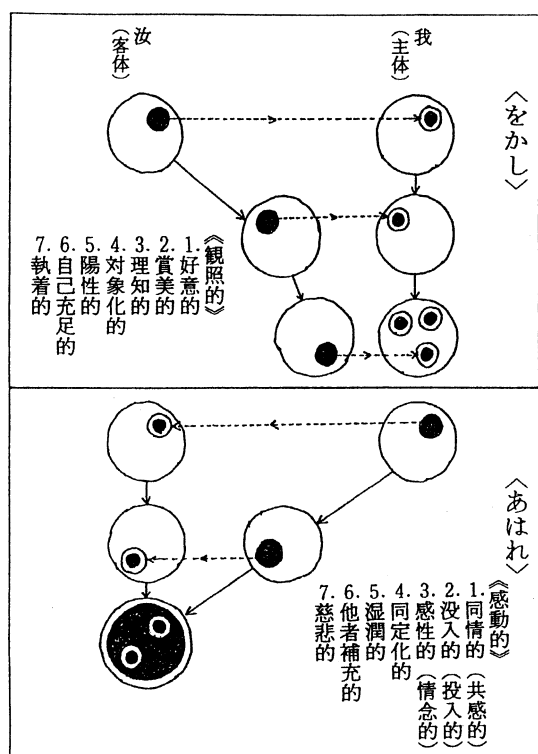
いったい「をかし」の原義は、どのような意味内容のものであるの
か。根来司によれば、平安時代の「をかし」は、動詞「をく」(「招く」
の語幹に、情意性の接辞「あし」が伴われて「をくあし」をかし」と
いうふうになって成立したものであるという。⁸したがって「をかし」の
原義は、「自分の手もとに招き寄せて賞美したいという意味」を表し、
「快い明るい気持」を含む「肯定的な感情」を持つ語ということになる。
その場合、「主体と対象とが生活的行為的な持続的関係を持たず」「主
体が対象を外から見、主体が自分の姿勢を崩さずに自分を立て通すこ
とによって、愛賞する気持が『をかし』となることは言うまでもない。¹⁰

「動詞ヲキ(招)の形容詞形」説に立つて、「平安中期以前の『をかし』」の数多くの例には、『をこ(愚)』の持つ、道化て馬鹿馬鹿しく、あきれていやに思う気持の例はなく、好意的に興味を持って迎えたい気持で使うものが多い」とする『岩波古語辞典』〈補訂版〉^①の解説も右と変わるころがない。『枕草子』の「をかし」の用例の多くも、基本的にはそうした意味内容に漏れるものではないであろう。

『枕草子』の「をかし」が、対象を「好意的に興味を持って迎えたい気持」に触発され、それを「自分の手もとに招き寄せて賞美したい」という意味」を原義するものであることについてはすでにふれた。感性的、情感的契機を基調とする清少納言の醒めた情動的感覺が、一定の距離を設定して対象を「観る」とともに、「好意的に興味を持って迎えたい」という「快の感情」において、能動的に「自分の手もとに招き寄せて賞美したい」と「感ずる」調和的、陽性的な美的体験であることは、注解を加えるまでもあるまい。「をかし」の感情内容は、受動的な美的観照・享受の面は勿論のこと、やがては『枕草子』の執筆活動を促すことになる能動的契機をも含んで、美意識としての要件を充足しうるものであると考えると差し支えないだろう。それだけではない。塚原鉄雄の指摘によれば、清少納言は『枕草子』の執筆をとおして「後宮女流の一員として、あるべきものを提供した」のであり、それは彼女にとって「『あるべき』美であった」のにとどまらず、「宮廷社会にとつても、やはり、『あるべき』美であった」ということである。『枕草子』における「をかし」の属性は、すべて美意識としての要件を指向していると言えよう。美意識としての「をかし」を分母とする作品として、『枕草子』の文芸的構造や特質を照射しうるのもそのために外

ならない。

ところで、清少納言は、右のような美意識としての「をかし」について理論的な談義を展開しているのではない。自らの美の原理、美的理念、美的精神を直接開陳したわけでもない。『枕草子』という作品世界の形象をとおして、そうした美意識を具象化しえたのである。具体的な作品世界を対象に、美意識としての「をかし」の特性を究明するゆえんである。なお、「をかし」を「あはれ」と対比して図示すれば次のとおりである。



三

『枕草子』は、類聚的章段（類想章段）・随想的章段（随想章段）・日記的章段（回想章段）の三つの章段から成る。¹³その類聚的章段の中でも、「……は」型の諸段は、「あてなるもの」とか「ありがたきもの」などの「……もの」型の部分と区別して、一般に名詞的、題詞的章段とも呼ばれる。この「……は」型の章段の特色は、伝統的な類題意識や歌枕意識などの、いわゆる題詞集的発想を前提としながらも、そこに観賞的言辞の挿入による奔放自在な逸脱が試みられていることである。一〇段の「山は」を例に引いてみよう。

山は をぐら山。かせ山。三笠山。このくれ山。いりたちの山。わすれずの山。すゑの松山。かたさり山こそ、いかならんとをかしけれ。いつはた山。かへる山。のちせの山。あさくら山、よそに見るぞをかしき。おほひれ山もをかし。臨時の祭の舞人などのおもひ出らるゝなるべし。三輪の山をかし。たむけ山。まちな山。たまさか山。みみなし山。

三巻本には「をぐら山」以下一八の山の名が挙げられているのに対して、能因本三七、堺本二七、前田家本四〇と、各系統本間にはなほだしい異同が認められる。ここでは、三巻本系統の本文に従う。これによると、右の一八の山の名のうち、作者は、主として和歌や歌枕などの既成の知識に依拠しながら、それ以外の世界からも積極的に取材

し、自在に増補を行ったらしい。歌枕としては逸することのできないはずの富士山・吉野山・筑波山・佐保山・龍田山などを記さないところに、単なる歌枕的知識の羅列に終わらない、作者独自の文芸的世界の発現を指摘できるだろう。和歌の詠作者が、その歌材を集めた髓腦の類とは、発想の本質において全く異なる美的精神の所産である。対象の選択に作者の「をかし」の美意識が介在し、連想作用が果てしなく繰り広げられるのである。山の連想構成にどのような原理があったかは分からない。掲出の順序が、自らの生活基盤である京に発して、全国 of 山の歌枕を一巡し、再びそこに帰着する循環的遠近法によるものであることは首肯されよう。数ある和歌や歌枕の中から一八の山が選出されたのは「をかし」の美意識の基準に合ったからであるに違いない。「かたさり山」「あさくら山」「おほひれ山」「三輪の山」を評する四例の「をかし」は、四つの山の選択のモチーフであるにとどまらない。この章段に記載された一八の山のすべてをつなぐ構成原理としての美意識でもある。¹⁴「をかし」という観賞的言辞は、そうしたものとして理解されねばなるまい。いずれも、対象に好意的な興味を感じ、それを心に深く賞美する衝動に発する観賞的、陽性的美意識の表出である。遠慮する意をそなえた「かたさり山」の形姿、古歌の世界に学んだ人生の無常、愛のはかなさ、そのことと関連の深い「あさくら山」、宮廷行事を連想させる「おほひれ山」、歌と伝説に覆われた「三輪の山」、——それらの未知の山々に遙かに関心を寄せる清少納言の、情動的感覚と連想的イメージとを結ぶ世界の評価表が、一八の固有名詞の列記と、その単調な叙述を破る観賞的短評の巧緻な組み合わせに外ならない。美意識としての「をかし」は、そういう重疊的表現構造を縫い取

るものとして機能している。したがって名詞的、題詞的章段の特質は、未知なるもの、無常なるもの、華麗なる事象などを対象として措定し、題材として展開する選択と連想との相関作用、その対象・題材への好意的、陽性的な関渉と感覚的、印象的な賞美の世界に求めることができる。それを、美意識としての「をかし」の心情構造であるとするのは、速断に過ぎるだろうか。

「……もの」型の発想形式を持つ、いわゆる形容詞的、批評的章段は、心情ないし観念を表す語を題詞として冒頭に据え、それに対応する素材を断止なく書き連ねたものである。すべて約八〇段に及ぶ。それらは平安朝の美的趣向に深く根差したものであるには違いないが、そうした既成の事項や理念を媒介として、対象の静態や動態、生動相をそれぞれの確に見据えつつ¹⁵、変化に富む鋭い観照を繰り広げるところに『枕草子』の本領が内在する。形容詞的、批評的章段のことごとくが、「をかし」の美意識によって一律に裁断されているわけではない。対象に向かう心に否定的な感覚が優先する場合、清少納言は決して「をかし」の短評を差し挟まない。一四〇段の「おそろしげなるもの」や一四二段の「いやしげなるもの」に「をかし」の心情語が用いられず、反面、一四四段の「うつくしきもの」に四例の「をかし」「をかしげなる」「をかしげに」などを用いて、微小なる対象への異常なまでの志向に基づく「うつくしきもの」の本質を浮き彫りにしているのは、その一例である。否定的、消極的な対象把握には、「をかし」の美意識の発動が抑止される。美的判断の停止である。「をかし」は、対象に寄せる好意的、陽性的「快」の感情に媒介されることよってのみ成立しうる美意識だからである。したがって、「……もの」型の形容詞的、批評的章

段は、作者が対象を「をかし」と感得する肯定的場合と、「をかし」と感知しない否定的場合の二つの系列に分けることができるかもしれない。前者の系列の章段に限って「をかし」の評語の活用が目立ち、「をかし」きゆえんを解説・論評するが、後者の諸段にそれが見当たらないのは当然であると言えよう。

四

それでは、右のような美意識としての「をかし」は、清少納言のいかなる精神構造に淵源するものであるのか。七二段「ありがたきもの」についてみよう。

ありがたきもの 舅にほめらるる婿。又、姑に思はるる嫁の君。毛のよくぬくる銀の毛抜。主そしらぬ従者。つゆのくせなき。かたち、心ありさま、すぐれ、世にふる程、いささかの疵なき。おなじ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかのひまなく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそかたけれ。

物語、集など書きうつすに、本に墨つけぬ。よき草子などはいみじう心して書けど、かならずこそきたなげになるめれ。男、女をばいはじ、女ども、契ふかくてかたらふ人の、末までなかよき人、かたし。

これは、さまざまな人間関係の中に、「ありがたきもの」の対象を探

り出したものである。その観照の卓拔さや真実性には、共感を強く誘われるものがある。日常生活の中で見落とされているもの、あるいは見慣れた情景に対して、新たな視座からの発見の驚きもある。しかもその間に、銀の毛抜きや、写本の際にもとの本に墨をつけぬことなど、異質の題材を随時挿入して単調を破り、変化と緊張を企図する。このわずか九行の文章は、人生の複雑な暗い局面を暗示するかのごとくである。単純な言葉の羅列に終わらない清少納言の、苛立つ胸の響きや深い悲嘆の情を読みとることができるではないか。「ありがたきもの」とは、「存在しがたいもの」「めつたにないもの」という意味である。そうしたものが、ただ列挙されているにすぎないとすれば、事例の配合がいかに新奇であつたにしても、そしてまた、日常性の中に含まれる真実の発見に卓拔さが発揮されているにしても、所詮は現実随順以外のなものでもありえないはずである。けれどもこれは、そうした現実の事象を、単に書き連ねるといった類のものではない。「ありがたきもの」という現実観照が、それ故にこそ、在って欲しいもの、在れば感謝したくなるもの、という理想を追う心情に媒介されて成り立っている事実を見落とすわけにはいかない。現実の「もの」の否定的把握をとおして、結局は理想像としての「もの」を表出しようとするところに、清少納言の独自の美的精神がある。「……もの」型の諸段は、現実から理想へ、理念から事実へという循環的構造を示して、作者の理想追求的精神を具象化する。清少納言の焦慮と悲嘆と期待が微妙に交錯し合う文章の背裏には、右のような循環的思考と表現の方法が認められるのではないか。美意識としての「をかし」は、そうした清少納言の理想追求の精神的位相と決して無縁ではないであろう。その傾向

は、特に形容詞的、批評的な「……もの」型の章段に著しい。

ところで、『枕草子』の美的世界の特質を類聚的章段だけに求めることは危険であるにしても、随想的章段や日記的章段もまたそれと際立つた相違を示しているとは考えがたい。約八〇段に及ぶ随想的章段は、例えば一段の「春は曙」にみるように、「日は入り日」に始まる二三三段の類聚的章段と全く異質の発想方式によるものとは言えないだろう。¹⁷ある特定の季節や風物の中で、最も興趣のあるものを順次精細に描き分けていく筆法は、両者に通底する美的原理に支えられている。そこに措定された自然や人事は、すべて「をかし」の美意識によって捉えられ、配合され、論評を加えられていくのである。「をかし」の事象を幾重にも累積・揭示するのが、随想的章段の特性なのであろう。

七〇数段を数える日記的章段もまた、右のような表現構造から例外ではありえなかった。そのほとんどは、藤原道隆の中関白家を中心とする宮廷生活の「をかし」き局面を、肯定的に記したものである。中宮定子と中関白家に寄せる疑いなき賛嘆がその主題となる。自賛談と呼ばれている一連の叙述も、実は、中宮の傑出した存在や美質を引き立てるための方便にしかすぎない。醜悪な風貌を呈する政治社会の動向の中から、「をかし」を中心とする「あはれ」「めでたし」「おもしろし」などの肯定的美意識（塚原のいう第一種第二類に属する美的理念）によって選別された主家栄耀の世界が、そこにはある翳りをとどめた心をもって書き記されている。

それならば、これらの三つの章段は、全く同質のものであるのか。類聚的章段には、「をかし」の美意識に準拠しながらも、なお充足しえぬ心の内奥をのぞかせる清少納言の苛立たしげな表情が写し出されてい

た。既成の觀念や現実の在り方を峻拒する批評的精神の所産である。その批判的心情を媒介にして、絶えず理想像が結ばれようとする。けれどもそれは、結局、仮象の世界のものでしかありえない。

随想的章段の清少納言は、いかにも楽しげである。断片的にはあるにしても、そうした理想像を現実の自然や人事の中に、わずかずつ発見しては心を躍らせるのである。「をかし」という觀賞の基準を獲得することによって、その可能性は果てしなく拡散するかのごとくである。

右のような可能性への夢が全円的に現前化するのには、中関白家を中心とする宮廷生活においてであり、中宮定子の無上の美質による輝かしい存在によってであった。日記的章段は、そのような意味で、自ら求めてやまなかつた理想的世界の具現を、熱烈な共感のもとに語ったものであると言えよう。その理想像としての中関白家Ⅱ中宮定子の寂寞とした没落の史実には一言もふれず、ひたすら主家榮耀の局面にのみ筆を走らせる清少納言の鳴咽が漏れ伝わってくるようではないか。日記的章段にあらわれる中宮は、作者にとつて、好意と共感をもつてどれほど深く賞美しても、なお飽くことを知らない「をかし」の美意識の至高の対象だったのに違いない。美意識としての「をかし」は、作者の理想追求の精神の高揚と契合して、日記的章段の世界に奔流し、その美的諸相を複雑な人生体験との関連において十全に顯現するに至るのである。そのとき、清少納言の「をかし」の感性は、宮仕え女房的心情共同体¹⁸としての美意識の枠を超脱して、鋭利な独創の方途を模索し、実践することになる。『枕草子』が、そのようなモチーフによる作品として成立したものであることは疑いを入れない。硬直化・形骸化

現象を呈しつつあった当代の『古今集』的、和歌的美学を否定的媒介として、対象の静態性や動態性、生動相をそれぞれの確に把握しつつ、自己の体験や理想的理念と等価な美意識を忠実に表現しうる道を、新たなジャンルの中に創出したゆえんである。「をかし」の美意識が、「かく在るべき世界」「かく在って欲しいと思う世界」を希求してやまない清少納言の理想追求の精神に淵源するものであったことも忘れがたい。

五

「をかし」は、もともと対象を「好意的に興味を持つて迎えたい気持ち」に触発され、それを「自分の手もとに招き寄せて賞美したいという意味」を表す明快で陽性な心情語である。対象の持つ美質をもつて自身の欠落部分を補填するものではあるが、対象と自己の同定化を目的とすることはない。『枕草子』にみられる四四五例の「をかし」の用法も、基本的には右の意味内容を逸脱するものではない。醒めた情動的感覺が、一定の距離を保つて対象を「観る」とともに、「快の感情」において明るく「感ずる」調和的、陽性的関渉の様式は、美意識としての要件を充足するものである。更に「をかし」は、清少納言の希求する理想の世界においてけざやかに生動し、しかもその世界が、宮廷社会にとつてもひとしく願望されたものである故に、「在るべき心情共同体」の美的体験とも符合する。『枕草子』における「をかし」の属性が、すべて美意識の基本的要件を充足していることは明白である。そうした

「をかし」の美意識が、典型的にあらわれた短章を引いてみよう。随想的章段の一つ、二一五段の文章である。

月のいとあかきに、川をわたれば、牛のあゆむままに、水晶など
のわたるやうに、水のちりたるこそをかしけれ。

膠着化しつつあった平安朝の和歌的美学の静態的なまじしでは律し
きることのかなわぬ、空間と時間の交錯相、光と影と音の交響楽と
でもいべき動態的、印象的な詩的散文である。静止的、静態的に
はなく、対象の動態性・生動相や時間性・空間性をさながらに捉える
右のような表現にこそ「をかし」の美意識の成立をみることができ
う。⁽²⁰⁾それはともかくとして、右と同類の表現は、類聚的章段の世界を
も明るく快い色調をもつて鮮烈に染めあげる。そこでは、事項・事象
の選択や配合に、現実から理想へ、理念から事実へという循環的方法
が採られて、清少納言の理想追求的精神が具象化される。実人生への
悲嘆の痛切さと、かく在るべき人生を庶幾する情念の強さを証立てる
精神構造に由来するものであることは言うまでもない。そのかく在る
べき理想的世界が、全円的に現前化するのには主家中関白家の栄耀と中
宮定子の無類の美質によるまばゆいばかりの存在においてであった。
それは、「をかし」の美意識のはたらく至高の対象だったはずである。
日記的章段は、そういう華やいだ時空間の善美を深い共感を込めて描
出する。それがすでに失われた善美であり、崩壊した時空間である故
に、そうした世界に愛着する清少納言の心底は複雑に揺らぐ。理想追
求の精神と現実世界の否定的側面との落差は、清少納言の観照にも暗

い翳りを落とさずにはおかない。『枕草子』の深い悲哀感、その間隙
に胚胎する。萩谷朴は、「悲哀の文学」という視座から、『枕草子』の
覆われた本質をこう説明する。⁽²¹⁾傾聴すべき提言である。

清少納言といえども、悲哀感に対して決して不感症であつたわ
けでもなく、強いて感情を抑圧して、事実から全く眼を覆うこと
もなかったわけである。そこに、『枕草子』という作品を、悲哀の文
学としての一面から改めて読み直し、清少納言という作者の精神
構造について認識を更に深くする必要があるものと思われるので
ある。

こうして「をかし」の淵源であつたはずの理想追求の精神基底は、や
がて対象没入的、感動的、湿潤的「あはれ」の美意識をも醸成するに
至る。だとすれば、『枕草子』の美意識を、賞美的、観照的、対象化的、
自己充足的、自己執着的、陽性的「をかし」と、そこから必然的に派
生する没入的、感動的、同定化的、他者補充的、慈悲的、湿潤的「あ
はれ」との微妙な相関性を無視して語ることが許されなくなるだろう。
更に、「をかし」の美意識に内包される「日本の民族的な志向」として
の「短章性」への関心や、「なにもなにも、ちひさきものはみなうつく
し」(二四四段)と記す微小なる対象への異常なまでの心的傾斜は、と
もに日本の文化や文芸の基層に潜む本質的な断面をのぞかせるもので
あるに違いない。⁽²²⁾美意識としての「をかし」をとおして、『枕草子』の
文芸的構造や特質の複雑な広がりや深さを照射するためには、改めて
緻密な論証を積み重ねなければならないであろう。

おわりに

「をかし」の美意識の十全な可能性への夢が全円的に現前化するの
は、中関白家を中心とする後宮生活においてであり、中宮定子の無上
の美質による輝かしい存在によってであつた。清少納言のまなざしは、
ひたすら中宮定子の上に熱く注がれる。和漢にわたる広い知識、人並
み優れた才学、奥深い教養、機知に富む明るい人柄、神秘的なまでに
端麗な容姿や振る舞い、運命の嵐にもめげずに、その重圧を受け入れ
て立つしなやかな意志、そして他人への慈愛にみちた心やり、——中
宮定子は、すべての面において傑出した美質を完備した女性であつた。
その人、ひとりの存在が、ひとときわ光り輝き、やがてその光が、周囲
を温かく包んで広がって行く。その人とともに生きることが、わが身
をも華やかにし、至福の夢の世界に生きる歓喜を呼ぶ。定子は、そう
いう人であつた。清少納言にとって、かく在りたいと思ひ描き、念じ
続けてきた理想的女性像であつたに違いない。その定子の愛顧を受け、
それにこたえるべく努力する清少納言の心のときめきは、『枕草子』の
至る所に聴き取ることができる²⁴。七二段「ありがたきもの」の
最後は、「女どもも、契ふかくてかたらふ人の、末までなかき人、か
たし。」という一節で終わる。清少納言の胸底を、定子との信頼関係へ
の思いがよぎったことは、想像にかたくない。清少納言は、主従の関
係を超えて、理想的女性像としての定子への自己充足的同定化を試み
る。そのことが、とりもなおさず、「をかし」の美意識の至高の対象と
しての定子を賛嘆してやまない『枕草子』の、文芸的世界の基本的構

図に外ならなかったのである。定子や中関白家の没落と運命とともに
した清少納言こそ、実は、挫折への暗い思いを断ち切り、悲嘆の落涙
をおしとどめて、幸せな栄光の中に、自らの身を強く措定しえた、典
型的な宮仕え女房だったのに違いない。

皇后定子の亡きあと、長保三年、三十六歳で宮仕えを退いた清少納
言の晩年についての定かな記録は残されていない。仮に、六十歳の高
齢を保ったとしても、退出後二十五年間の足取りは、すべて藪の中
である。彼女は、老受領藤原棟世との再婚生活の中で、理想的女性像と
しての定子への色あせることのない夢を抱き続けて老いて行つたのだ
ろうか。『古事談』は、「清少納言零落之後」の話を載せ、清少納言の
矜持にみちた心意気を伝える。『扶桑拾葉集』の「作者系図」に、「嘗
テ枕草子ヲ著シ老年落魄シテ筑州民門二卒スト云」とあるのは誤伝に
過ぎないだろう。『無名草子』は、「はかばかしきよすがなどもなかり
けるにや、乳母の子なりける者に具して、遙かなる田舎にまかりて住
みける」と述べる。能因本『枕草子』奥書では、これを脚色して阿波
国とする。『閑田耕筆』卷之一は、「讃岐象頭山の傍に、石の誌有て、清
少納言の古墳を伝ふ」と記し、『二話一言』卷四十八は、「近江の国に
清塚といへるありける」と伝える。いずれも美人流浪伝承の同類であつ
て信じがたい²⁵。紫式部が、清少納言に對抗意識をあらわにして、『紫式
部日記』²⁶の中で、「行く末うたてのみはべれば」と書き、「そのあだに
なりぬる人の果て、いかでかはよくはべらん」と述べた予言に、清少
納言落魄伝承の始源を辿ることもできよう。

一方、清少納言の作に擬定される『松島日記』²⁷（鎌倉期以降、室町初
期までに成立か）は、苦難にみちた行脚の末、陸奥国松島の僧庵で仏

道に精進する彼女の老残の姿を伝える。「都のかたのおとづれも稀になりゆくに、いとどしく後の宮の御おもかげ、御堂殿の御栄の末も、夢よりは幾らかまさりけむ、いかに仏の御心には、定め給はむや」と、皇后定子の面影をしのぶ、老いたる清少納言の最晩年の心境に思いをひそめて、『松島日記』は終わる。清少納言の晩年は、定子の宮仕え女房としての、過去の栄光の日々を追懐しつつ、わびしく、そして幸せに過ぎ去って行ったのであろうか。

注

(1) 菊田茂男「枕草子の美意識」(『枕草子講座』1、有精堂、昭和50)。「美意識」の概念規定の詳細については、竹内敏雄編修『美事典』(弘文堂、昭和36)を参照されたい。

(2) 山村美紗「清少納言殺人事件」(『カッパ・ノベルス』(光文社、平成5)のちに、志賀貢の「解説」を付して『光文社文庫』に再録され、平成8年、光文社から刊行された。

(3) 菊田茂男「枕草子の美意識」(『枕草子講座』1、有精堂、昭和50)、「枕草子」の美意識(『国文学』昭和63・4)、「『枕草子』の文芸的構造」をかし」の美意識を中心として(『日本文藝学』30、平成5・11)、「『枕草子』の基本的構図」をかし」の美意識を視座として(『日本文学ノート』31、平成8・1)参照。

(4) 以下、『枕草子』の作品本文の引用及び注解は、渡辺実校注『枕草子』(『新日本古典文学大系』(岩波書店、平成3)による。ただし、部分的に本文の表記を改めたところもある。

(5) 塚原鉄雄「『枕草子』の美的理念」(『枕草子』(古文研究シリーズ2)〈尚学図書、昭和48・4〉参照。なお、同論文は、「美的理念」をかし)その他(『国文学解釈と鑑賞』昭和39・11)を再録したものである。

(6) 『無名草子』の作品本文の引用は、桑原博史校注『無名草子』(『新潮日本古典集成』(新潮社、昭和51)によった。

(7) 根来司「『枕草子』の『見立て』と『をかし』」(『研究発表中古語中古文学』〈笠間書院、昭和58〉)、原岡文子「『枕草子』の世界」(『美意識』(秋山虔編『朝文学史』(東京大学出版会、昭和59)、沢田正子「『枕草子』の美意識」(笠間書院、昭和60)参照。更に、岡崎義恵『美の伝統』(弘文堂書房、昭和15)の見解も見過ごしたい。岡崎説の骨子は、次のとおりである。

「をかし」の本質は「一をかし」と「あはれ」をかしは「あはれ」と並んで、日本文芸における美的情調の二大指標である。共にある対象について、愛の心を持ち、これを許容するところに生ずる気分を示すもので、それぞれは喜劇的情調、悲劇的情調というのに近い。「をかし」と思う心はいわば開かれたる心、状態であり、あくまでも対象を外から観て、自己との距離を保ちつつ、対象の好適なことを意識しようとする快適な気分である。これに対して「あはれ」と思う心は、いわば閉じられたる心、状態であり、対象と自己との距離を保ちつつそれを短縮して、内面的に融合しようとする感傷的な気分である。(初出『日本文学論攷』(文学社、昭和十三年一月、原題「をかしの考察」)、『二をかし』の二面)ある対象を観るところに生ずる「をかし」の情調には、おのずから対象の属性に基づく二つの側面がある。すなわち、対象物に価値がある場合の「をかし」は「感賞」の意味を持ち、価値がない場合の「をかし」は「侮

弄」の意味を持つことになる。そして「感賞」の「をかし」の対象は、主として優美という美的様相を呈し、「侮弄」のそれは、滑稽という様相を呈する。平安朝に主流を占めたのは、優美なものを対象とする「感賞」の「をかし」であったが、中世以後になると、滑稽なものを対象とする「侮弄」の「をかし」が、文芸の大きな領域を占めるようになる。(初出『文学』第六卷第八号、昭和十三年八月、原題「をかし」の本質について)。

(右の引用は、『岡崎義恵博士著作解題』へ宝文館出版、昭和45)による。)

- (8) 『枕草子』における「をかし」の用例の検索は、松村博司監修『枕草子総索引』(右文書院、昭和42)によった。榊原邦彦編『枕草子本文及び総索引』(和泉書院索引叢書33)(和泉書院、平6)もこれに近い。なお、「をかし」の用例の総数について、佐藤喜三郎「枕草子に於ける『をかし』」(『解釈』昭和30・12)は四六一例、上村悦子「紫式部日記攷」(『王朝女流作家の研究』笠間書院、昭和50)は四六六例、宮島達夫編『古典対照語彙表』(笠間索引叢刊)(笠間書院、昭和46)は、「をかし」四二二例、「をかしげ」二三例、「をかしさ」一例など、四四六例を、それぞれ報告している。また、松浦照子・片岡信二・安部清哉「平安文学における形容詞対照語彙表」(『フェリス女学院大学文学部紀要』26、平成3・3)は、「をかし」四二二例とする。雑纂本系(三卷本へ)類本・二類本、能因本)及び類纂本系(界本、前田家本)の本文異同を考慮すべきことは言うまでもない。

- (9) 根来司「枕草子の文体——『見立て』と『をかし』——」(『国語と国文学』昭和49・4)参照。

- (10) (9)に同じ。

- (11) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』(補訂版)(岩波書店、平成4)参照。

- (12) (5)に同じ。

- (13) 上野理「『もの』型章段」(『国文学』昭和63・4)によれば、各章段の段数は、次のとおりである。

類聚章段——一四九段(四六・七%)

「一は」型——七四段

「一もの」型——七五段

随想章段——一二五段(三六・〇%)

日記章段——五五段(二七・二%)

- (14) 「山は」の章段についての私見は、(1)の「枕草子の美意識」を参照されたい。また、西山秀人「歌枕への挑戦——類聚章段の試み」(『国文学』平成8・1)の見解も参考になろう。

- (15) 李英敬「『枕草子』の動的な美の表現——雪を中心に——」(『日本文芸論叢』6、昭和63・3)、「『枕草子』の動的な美の表現——人事の描写を中心に——」(『日本文芸論叢』7、平成1・10)参照。

- (16) 清少納言の理想追求的精神については、菊田茂男「清少納言の物語観」(『文芸研究』75、昭和48・12)において指摘したことがある。

- (17) 秋山虔「枕草子論」(『源氏物語の世界』へ東京大学出版会、昭和39)参照。

- (18) 菊田茂男「家の女——蜻蛉日記」(『国文学』昭和50・12)、「道綱母の精神的位相——『蜻蛉日記』の世界の基層——」(『日本文芸論叢』笠間書院、昭和51)、「道綱母の体験と蜻蛉日記の表現」(『二冊の講座 蜻蛉日記』へ日本の古典文学1へ、有精堂、昭和56)等において、「家の女」と「宮仕え

女房」の位相について言及したことがある。

- (19) 風巻景次郎「自然観照における新傾向の発生―『枕草紙』における自然観照の性質―」(『風巻景次郎全集』6、桜楓社、昭和45)の見解とは異なる。

- (20) (7)の沢田正子『枕草子の美意識』及び(15)の李英敬論文などを参照されたい。

- (21) 萩谷朴「悲哀の文学―枕草子の一面」(『国語国文』昭和40・10)参照。

- (22) 小西甚一『日本文藝史』I(講談社、昭和60)参照。

- (23) 李御寧(イー・オリョン)『縮み』志向の日本人(学生社、昭和57)参照。

- (24) 定子と清少納言との精神的交響については、菊田茂男「宮仕え女房の栄光と挫折―『枕草子』の美意識―」(『日本古典文芸にみる女性像』へ放送による東北大学開放講座)、東北大学教育学部附属大学教育開放センター、平成3・9)において述べたことがある。

- (25) 岸上慎二『清少納言伝記攷』(新生社、昭和33)、相原精次『みちのく伝承―実方中将と清少納言の恋―』(彩流社、平成3)参照。

- (26) 『紫式部日記』の作品本文の引用は、宮崎莊平『紫式部日記全訳注』上・下(講談社学術文庫)(講談社、平成14)による。

- (27) 『松島日記』については、作品本文の翻刻を含めて、左の「補注」(Ⅰ)から(Ⅴ)において略述した。参照されたい。

補注

- (Ⅰ) 『松島日記』については、次の研究を参照した。

- (1) 呉羽長・鈴木則郎「東北大学附属図書館所蔵『松嶋日記』翻刻と注釈」(『日本文化研究所研究報告別巻』18、昭和56・3)、「『松嶋日記』考―その成立と清少納言の晩年―」(『日本文化研究所研究報告別巻』20、昭和58・3)
- (2) 中西健治「松嶋日記の研究(本文・校本編)」(『相愛大学研究論集』14・1、平成9・10)
- (3) 小森潔・室城秀之「清少納言松島日記」(『日本英史編』日本古典偽書叢刊)第二巻(現代思潮新社、平成16)
- (4) 田中重太郎「清少納言―その晩年についての研究資料―」(『国文学』昭和39・1)
- (5) 稲賀敬二「清少納言『松嶋日記』抄」(『鑑賞日本の古典 枕草子』へ尚学図書・小学館、昭和55)
- (付記) 昭和四十年代後半、「土佐日記見聞抄」(『平安文学研究』46・47、昭和46・6・11)を発表の際、同誌編集・刊行者田中重太郎氏から、「『松島日記』の翻刻と研究」を寄稿するよう求められたが、準備が十分のため、長い間、放置したままで過ごした。その後、私の意図を汲み取ってくれた呉羽長・鈴木則郎の両氏によって、(Ⅰ)の(1)の研究成果が公刊されるに至った。

(Ⅱ) 『松島日記』の梗概

定子皇后の死後、皇后に親しく仕えていた女房達は、彼女のことを忘れ去り、あるいはまた世をそむく有様となる。こうした時世を悲しみながら、老いた清少納言は藤原道長の内室(倫子)のもとに往来し、尼として阿弥陀信仰を強くしていた。彼女は都での生活にくぎりをつけ、仏の来迎を期して縁者(祖父あきただの娘、おば)のいる陸奥国へ旅立つことを決意する。この時点で清少納言の心には、かつて清水寺付近で侍達のとがめをうけたことが生々しい記憶として残っていた。

冬のはじめのある日都を出立した清少納言は、甲斐の郡・伊勢の浜・鳴海・八橋・宇津の山・清見が関を經、浮島が原まで途上出逢った人々の善意に支えられて到り着く。その間、八橋・宇津の山では自己の孤独な旅の苦辛・悲哀を古の漂泊者在原業平の旅に重ね合わせたりもする。しかし、老いた清少納言にとって雪を冠する足柄の高嶺は越え難く、その麓の僧房で年を明かすことを余儀なくされる。この折珍しい年の暮の招魂の儀式を見、村里の火事を望見することになる。

ようやく春になって旅に支障がなくなると、彼女はそここの僧にいとまを告げ、雄々しい若者達に背負われて足柄山を越え、古河・白河と北上を續けて陸奥国宮城郡国府の屋に至る。しかしその地にあきただの娘の尼はいなかった。四方をたずねまわるに松島という地にいることがわかり、そこへ尋ねて行つた時には、すでに年も暮れようとしていた。

年明けて、ようやく捜し求める尼に再会できた清少納言は、感涙にむせぶ。この尼と一蓮托生の思いをもつとともに仏の名を称え修行に専心したが、その尼は年長の清少納言を残して先立ってしまう。かくして一人残された清少納言は、京に居る知人の大納言の乳母に消息を送ったりするが、それ以後六年の間なお心を専らに仏の来迎の日を待ちつつ今に至る。そうした彼女の心にくと去来するのは、定子皇后のおもかげ、あるいは道長の栄華の末であった。

(二) 呉羽・鈴木論文による

(Ⅲ) 『松島日記』の成立

東北大学附属図書館所蔵『松島日記』の「奥書(識語)」に、「仁治皇帝之勅製之、今借道朝親王之御本、写之畢」とある。仮にこれに従うとすれば、仁治皇帝(四条天皇)治世の仁治年間(一二四〇年—一二四三年)には、すでにこの作品が存在していたことになる。しかしながら、表現や仏教思想などの点からは、鎌倉期以降、室町時代初期の成立とみるのが穩当だろう。

(Ⅳ) 『松島日記』の伝本

岩波書店版『国書総目録』や『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録 縮刷版』によれば、三八種を超える伝本の存在が知られる。

次に紹介する翻刻作品本文の底本である東北大学附属図書館所蔵『松島日記』の書誌は、左のとおりである(『呉羽・鈴木論文』参照)。

写本一冊。袋綴本。タテ二六・〇糎、ヨコ一八・一糎。本文料紙は斐楮交漉き、墨付一七丁、遊紙一丁、計一八丁。墨付料紙第二丁は、表面中央に「松島日記」と書くのみで、本文は第二丁表から始まる。各面一〇行、各行およそ二〇字。表紙は薄茶の厚紙で、表表紙左上には「松島日記」と書かれた題簽が貼つてある。また本写本には墨絵が一〇図(一図は半丁)、第四・七・九・一二・一四の各丁に挿入されている。

(Ⅴ) 作品本文の翻刻に当たっては、頭注・傍注・識語を全て省略した。

松嶋日記

清少納言

きさいの宮の、はかなうなり、おはします
につけて、さるものゝうときは、さらにて
おほしいつるだに、なき世になり行わさ、
かなしきかきりはこゝらためしあるへきを
少将の尼、侍従のつほねらは、いやそきたる
すまゐ、みやこのうちを、かすまふる、家の犬
よりも、口をしきものならんにかは、いかに
おいさぬへき身すら、かくしかねぬる、千
とせのまつならぬ、身のすくせおほけな

松嶋日記

清少納言

きさいの宮の、はかなうなり、おはします
につけて、さるものゝうときは、さらにて
おほしいつるだに、なき世になり行わさ、
かなしきかきりはこゝらためしあるへきを
少将の尼、侍従のつほねらは、いやそきたる
すまゐ、みやこのうちを、かすまふる、家の犬
よりも、口をしきものならんにかは、いかに
おいさぬへき身すら、かくしかねぬる、千
とせのまつならぬ、身のすくせおほけな

き、みたのらいかうも、ねかふにはあかすやは、
おほしけんを、かゝるとこなれたる、すみかは、お
ほつかなく、うしろめたしや、木の丸とのに
あらぬ、をうなのたひ、たれしか、名のりこち
とかめんかし、こそおもひたちつゝくる、ものう
さは、いへはさらなり、もとの、ひたんの、おとゝの、
みたいはんとを、つねに、しるかたの、しほ
りして、住うからす、かよひしも、今日をかき
りの、なこりとおもひつゝくれと、さいつ
ころ、ものゝふの、とかめにあひにたる、清水

3丁オ

のあたりも、いまはおそろしからず、おほいし
下つうけの守なる人は、わかゆかりなるゆへ
に、そのむすめの、さそふ水を、つゐのあし
ろとして、みちのおくのかたに、おもひたちぬる
事よ、今日しも時雨めく比にて、都をへ
たてゝの、つとめての日は、伊勢路ちかき
ところ、甲斐のこほりといふに、やとりぬ、
こゝも、近江の国なりときくに、夜ひとひ、
石山のかた、三井寺のかたの、ゆく雲をな
む、在五のあその事、うら山しく、などゝ

3丁ウ

ひとりこちぬる、夜まれなり、草ねのまくら、
いとゝほたいのため、ねたきにも、明かた夜もやう

く、ところ／＼の、こむの雪も、はつかしきまで、
 しらみはてたり、いそぐべき道ならす、宿のあ
 るし、尾へのすかう、おほつかなしや、とものとす
 る人もなしと、つむやきかちなり、日もたか
 く、さしのほるに、時雨の雲きそひ来て、
 みのかさをもうしぬをとて、いつちともしら
 ぬ、みち行人の、老たるにかりてうして、つき
 なひつゝゆくに、そこら道のあなひ、よくも

4丁オ



4丁ウ



5丁オ

しりぬるや、答るに、むくつけからす、みやこ
 をいてゝ、日かすもわすれにたるかは、今日
 いつくの日を、来りけん、伊勢の海つら、
 すみわたり、かの舞人のかへすたもとな
 と、そのかみの、うちすみも、いたりて、おかし
 かりけん、鳴海と云宿を、すきにたるに、それ
 より、むまやつたひを、はるか。行すきて、三
 河の国と、名のみ聞しをなん、きゝまかふ
 も、うしろめたきに、八橋のくもても、くち
 にたるに、青柳の、梯たえて、かれたる

5丁ウ

落葉、こゝら、水にうかひて、おかしきに、おもひつゝ

くるも、むねいたしかし

ものおもふくもての水にちりうかふ

かれ枝の柳俤もなし

さ夜の中山といふに、うちつゝき、山かさな

りて、いつら上中下の、へたてわいため

なし、駿河の国、うつのやまに、まうの

ほるに、我にはあいしれる、すこうさも、と

もしく、みの笠も、くちにたるに、かたへのい

はほに腰うちかけて、やすらひぬ

6丁オ

宇津の山うつゝも夢も同じ世に

つゆのわかれやいつとさためむ

清見か関をこゆるに、旅のこゝろほそき

ところにつけたるもの、心のなくさみに

とて、めかりて、かへる女にや、われに得させ

ぬ、言葉、のこなましぬをとて、みやこへと

いひそらして霜の毛衣も、露うちはら

ふ、よすかにもて、こゝに、ひと日ふた日、やすら

ひて、遠く見やれば、あしからの高ね、雲

おほひ、老たる、はきの、及へきにしも、あら

6丁ウ

すかし、うき嶋か原までも、道行人に、たす

けられて、ゆく／＼としも、なき、旅になん

ありぬる事よ、けふ雪みそれ、ふりこ。り

て、わらんつ。おもたゝしきに、とまやの

里と、いへるに、ひしりの、おこなひ、すまし

て、ゐはへるに、ことしは、こゝにて、年を送

りぬ。冬のうちには、いかてかとして、ひしり

の房にこもりて、たき木つき水こり

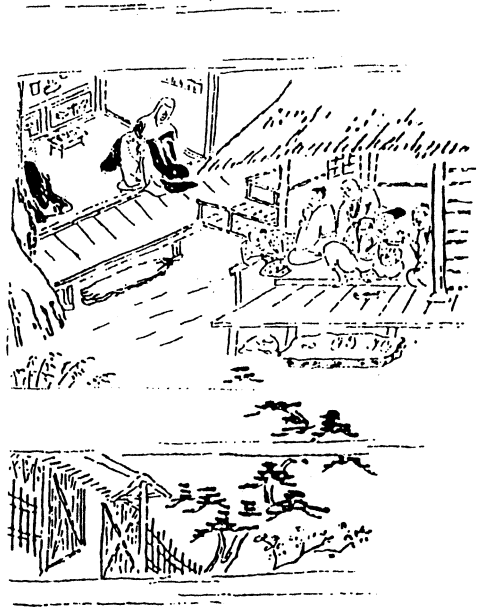
たむ。る、たつきもなくて、たゝゆする、

する、心つかひも、むなしきに、あすはとしの、

7丁オ



7丁ウ

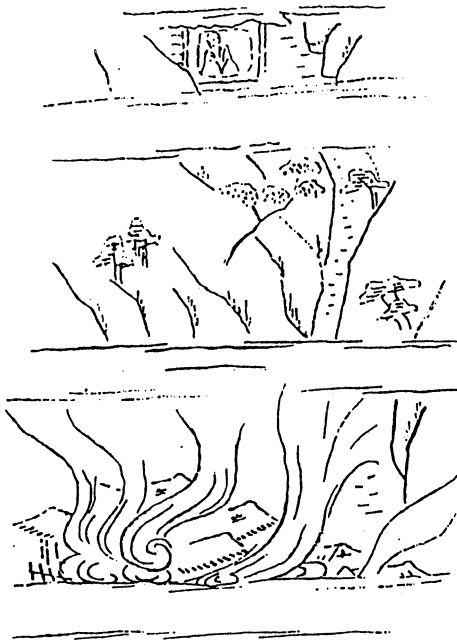


8丁オ

かへる日なりとて、松に、しきみ、たてそへ、
 玉まつる、うはそくの翁うはいのおも
 とたつも。此ひしり房に。来り、つとふに、
 其夜、海いかめしうなり、濱風、はけしく、
 ふきよせたる、真砂、雪をこほすやうに、立
 こみたるに、まさなの雪もふりぬ、ともしあか
 すとや、松に火を、ふきたためて、あたため酒
 を、かのうはそくの、おきな、むくつけきひ
 けにふきつゝものみ、ほしぬ、小夜もふ
 けすきて、麓の里に、とみの事

8丁ウ

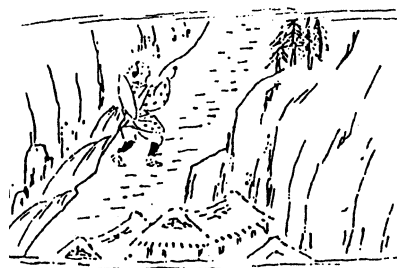
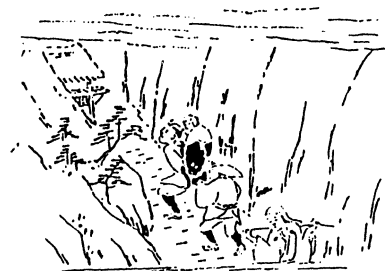
とて、ほのほ、たちのほりて、見るがうちに、



9丁オ

いくらか、ありけん、その里、みな、はいになり
 ぬへし、ひしりおきな、さらに、おとろかす、
 明日の、つとめをも、おもひよらすして、念
 仏してあかすに、春といへとも。行きもすく
 なく、旅立おのこも見えず、雪もひるの
 ことふりこめたり、とかくして、きさらきの、
 ころもすき、やよひの、空は、こゝもとゝゝ、いへ
 とも、はなもさかゆき、鳥のつはさも、霞
 そめてなん、さえつる、をとこゝろ、のとか

9丁ウ



10丁オ

なりやよひ。中の廿日の、夜、まところむ、心も
ゆくはかりなるに、まさしくも、みたのらいかう、
かしこきものから、東瑠璃の国に、むまれ
よとの、御をしへ、あるこゝちして、さめぬる
まゝに、あるしの、ひしりに、いとまたまはり
て、みちのおくの、たひに、おもひたち
ぬ、ところの、うはそくたち、わかき大郎の
男、二郎のおなどゝ、かすまへて、十かしら、は
かり、むくつけく、ふするのおきとも、おかし
きはかり、われををひて、高根をこゆべ

10丁ウ

きといひしらふ、いなひかたくて、いさなはれて、
まうのほるに、心きもゝ、つふるゝ、やうにして。の
ほるほとに、つみさりところ、なけれど、そこの

山を、たすけられて、こえぬれは、十日はかり
さすらふて、こそむさし野ゝすゑの、古河
のわたりといふに、いたる、それより行かふ人
に、たつねつゝ、白河の関に、かゝる。女は、老た
りといへと、関守の見とめて、なまからき
や、ゆき、あたらんにと、いふを、聞におそろし
き、ものから、ゆくに、程ちかくなりて、つゐに、

11丁オ

とをるに、事なくて、関守、こゝろある人にて、
かれいゐをわけて、あたへぬ

名をさへもいさしら川の関守の

いかにまかへてかくるなみたそ

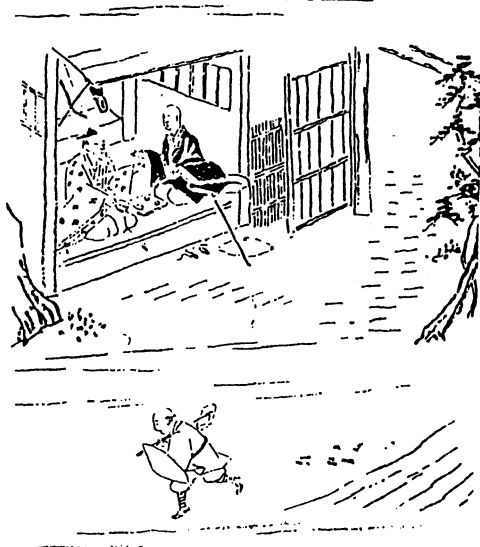
と心に、念しつゝ、くたり行に、二十日はかり
を、からきめして、みちのおくの、みやき野郡、
国府の屋、といふにつきたり、これより、きり
やの庄と、いふにしもつうけの、みこともち、
あきたゝの、むすめの、すむと聞て、たつ
ねて、ゆくに、おもひの外に、そこを、まかて

11丁ウ

て、松嶋と。都にても、きゝ耳おかしかり
ぬへき、浦に、すむと聞て、いたりけるに、し
れるもの、なければ、かたはらの、僧房に、かたは
への、家づくり。たまはりてくらしたり。
ことしも、くれかゝるに、年のゆくゑをき

けは、こゝの大とこの、ひしり、なにかしの、
僧都の、御うへは、みやこの、おとゝなる、人
子なるへし、康和五とせの比に、こゝに來り
給ふといへり、かのあきたゝの、あその、尼た
つねまはるに、みやこ嶋といふに、住。つき

12丁オ



12丁ウ



13丁オ

て、おこなひ、すましたるに、行あふに、なくをあ
ひあふ、しほりとして、かたみにいふへく、かた
るへき、言葉もなし、仏の御名をとなへて、
うき年月、をくらむには、まさるすみか、
こゝをさりて、侍らすと、かたらひ、ちきり
て、住侍るに、此あませ、つとめてのとし、み
まかりぬ、我にをくる、事、六とせ、あなた
なるに、をくれさきたつ、かなしみ、さかさま
なる、仏事は、仏のいとひたまふ、ことこそ、
なにかしの、経に。侍るものを、さいへと、善

13丁ウ

をつみて、われをつみにも、をとせね、さは

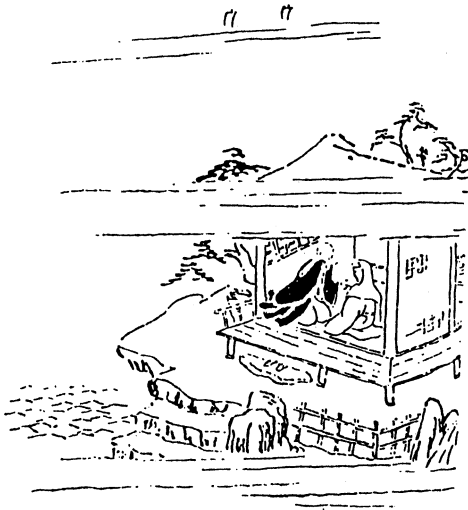
れいきとまるへき、身にし、侍らぬ、大納言の、
おもとは、此嶋の、さきのかみの、ゆかりある、よし
を聞て、ふみまいらせんとて

たよりある風もや吹と松しまに

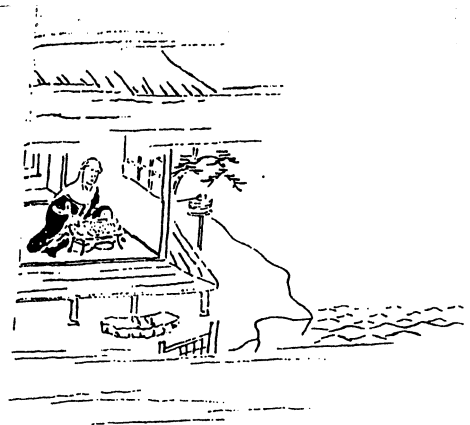
よせてひさしきあまのつり舟

とよみてをくりけり、それよりつとにおき、
よはに、いぬるにも、とみさうほたいの、ゑかう
のこゑ、たえずしてなむ、六とせは、今日に
いたりて、むかへつ、いきうしと、いひてとか、

14丁オ



14丁ウ



15丁オ

いさまかりさらんとも、たれゆるしなければ、思
したゝす、むかしのなにのえに、かくの僧の
やうに、てうしつにも、身をまかせかたし、あ
たに。立ゆく浪の行。ゑは、うらみかちに、
めかりて、すまむ、あまのたもとよそなら
すして、しほれかちなり

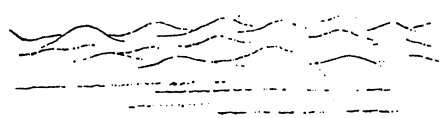
たちぬれてしほひの方に身をつくす

あまのうらみをたれにはるけん

このところは、例よりは、心まとひ、たちあ、
やすからぬにつけても、みやこのかたの、を

15丁ウ

とつれも、まれになり行に、いと、しく、き



さいの宮の、御おもかけ、御堂殿の、御さかへの
すゑも、夢よりは、いくらかまさりけむ、い
かに仏の御こゝろには、さため、たまはん
や、

とくもまれをうけのいづこも
まゐり宮の御おもかけ御堂殿の御さかへ
のすゑも夢よりはいくらかまさりけむい
かに仏の御こゝろにはさためたまはん
や、

(付記) 本稿は、平成六年十月八日(土)、岩手大学において行
われた、平成六年度全国大学国語国文学会秋季大会におけ
る公開講演「『枕草子』の世界―をかし」の美意識を補助線
として」の草稿に加筆したものである。

“Okashi” as Aesthetic Consciousness in *Makuranosōshi*

KIKUTA Shigeo

『枕草子』の世界

—— 美意識としての「をかし」を補助線として ——

『源氏物語』や『枕草子』を中心とする中古文芸における美意識としての「をかし」の原義については、従来、諸説が行われていて、定説と言えるほどの見解が見られないのが現状である。時代の推移や文芸様式の相異によって、語義・語法の上に大きな揺れが認められるのも、その理由のひとつである。

本居宣長『古事記伝』、柳田国男『笑の本願』『不幸なる芸術』などの説くように、「をかし」は、「をこ（愚）」の形容詞化で、「道化て馬鹿馬鹿しく、あきれていやに思う気持ち」を表すと見る説も広く行われているが、一方、中古文芸においては、むしろ、「対象を好意的に興味をもって招き寄せたい」という意味を含む用語例が圧倒的に多いこともまた確かである。

後者の「をかし」は、動詞「をく（招く）」の形容詞形で、その語幹に情意性の接辞「あし」が伴われて「をく—あし—をかし」というふうに変化した語形成・語構成によるものと考えられる。したがって、「をかし」の原義は、「対象を自分の手元に招き寄せて賞美したい」という意味を表し、「快い明るい気持ち」を含む「肯定的な感情」をもつ美的語詞ということになる。その場合、「主体と客体（対象）とが生活的・行為的な接続関係」をもたず、「主体が客体（対象）を外側から見、主体が自分の本来の姿勢を崩すことなく、自己を立て通すことによって対象を愛賞する気持ち」を含む意するものであることは言うまでもない。

このような美意識としての「をかし」の表現機能を補助線として『枕草子』の世界の文芸的構造や特質を照射したらどうなるか。これまで、相互関係性の稀薄な独立的章段群として区分けされてきた類聚的章段（類想章段）・随想的章段（随想章段）・日記的章段（回想章段）の三つの章段群の間を縫い取って通底する独自の精神構造や柔軟な文脈を支える太い糸、つまりは「かく在る世界」から「かく在るべき世界」や「かく在りたいと希求する世界」へと循環的に昇華する理想追求の精神の存在を究明することも可能になるに違いない。